

『浄土和讃講義』の翻刻（二）

普賢保之
戸田有香

前回に引き続き深励の木版刷り『浄土和讃講義』の翻刻を行った。深励の『浄土和讃講義』は木版刷りしかなかく翻刻されたものはない。今回も大学院の「仏教文化史特論」で『浄土和讃講義』の翻刻を通して内容理解に努めた。本書は木版刷りで比較的解読しやすいが、初心者には内容理解の前に解読自体が困難と思われる。そうしたことから、翻刻することの意義は大きいと思われる。今回は「浄土和讃」十一首について解読したものを翻刻している。

第十五会

光明照らしてたへざれば 不断光仏と名づけたり

聞光力のゆへなれば 心不断にて往生す

九に不断光。初に「光明照らしてたへざれば」と云句は不断光の「不断」の義を積し玉ふ。「断」は間断の義にてたへまのなき事なり。「不断光」と云は間断のなき、たへまのなき光明と云事なり。即ち弥陀の光明は尽未来際まで常に御照しなされてしばらくもたへまがなひと申す事なり。これ『大阿弥陀経』上(三十七右)に「阿弥陀仏光明無有極(乃至)无有当冥時」とこれ弥陀の光明のたえまのなきすがたをとき玉ふ。爾れば「尽未来際無量無數の未迄も暫くもたえまのなき光明なり。ゆへに今「光明てらしてたへざれば」との玉ふなり。ときにこれより上の清浄・歡喜・智慧光の三光は衆生の三毒の煩惱を対治なさるる一組なり。次にこの不断光を御出しなさるるは如何と云に上の三光は横に十方世界を利益し玉ふ。この不断光は豎に三世を利益したまふ光明なり。すなはち下の『大經和讃』には「無碍光仏のひかりには 清浄歡喜智慧光 その徳不可思議にして 十方諸有を利益せり」と是も横の利益に約し玉ふ。よて今も約する横の三光を明し終る故に、豎に三世を利益し玉ふ不断光の徳なり。すなはち本偈の文に「光明一切時普照」とあり。「一切時」と云は過去未来現在の三世の時においてしばらくもたえまなしと云事なり。爾れば横に十方豎に三世と云次第にて此へ不断光を出し玉ふなり。ときに『述文讚』中(四十四右)に「仏之常光恒為照益故不断」とあり。「仏の常光」と云は、すべて仏の光明に常光と現起光とあり。応身の釈迦如来で申せば、一尋と云て(七尺を尋と云)七尺四方を照し玉ふ光明は、つねに照し玉ふ光明なる故常光なり。又法華の会座に眉見より光明を放ちて、東方万八千の世界を照し玉ふとある如き光明は、其ときどきに現起し玉ふ光明ゆへに現起光と云なり。今この阿弥陀如来の十二光は現起光ではなし。弥陀の常光なり。爾るに応身とは違ふて「真報身」の常光なるゆへに常に十方世界をてらし、しばらくもたえまのなき義を顯す。不断光なりと積するが『述文讚』の意なり。此常光・現起光と云事は、応身仏の光明にある事にて、報身仏の光明にはない事ぢやと申すものあれども、さようではなし。華嚴の『探玄記』三(初右)には『華嚴經』の盧遮那仏報身の上に常光・現起光

を分ちてあり。爾れば弥陀如来の真報身の上で常光・現起光と云事、随分申さるる事なり。

「聞光力のゆへなれば、心不断にて往生す」この文の扱は『大経』では「聞其光明威神功德日夜称説至心不断随意所願得生其国」とありて、この文に「至心不断」とあるゆへ、十二光の中では不断光の徳を顕す経文とみゆるゆへに、この不断光の下に取り合せて「聞光力のゆへに心不断」との玉ふなり。ときにこの「聞光力のゆへに心不断」の文、解しがたし。『六要鈔』五(十四右)の釈の意ろでは「聞光力と云は、ひかりをきくちからと云ことにて、弥陀の攝取不捨の光明の利益をきくちからによりて、行者のところがたえずに信心相續することを聞光力のゆへに心不断と云」と。これは力の字を聞の字へ付て釈し玉ふ。衆生が光明の利益を聞たからと云ことにみ玉ふなり。これは『六要鈔』の御釈なれども『大経』の文からみれば依用しがたし。これが力の字を光の字へ付て「光力をきくゆへ」にと解さねばならぬ所なり。『大経』の文に「聞其光明威神功德」と云は光明の威神力のことなり。光明の威神力からきくことなるゆへ、略して光力をきくとの玉ふなり。『讚弥陀偈』並びに和讃の文は甚だ短かけれども、『大経』の文二十四字を撰し尽し玉へり。経文の「聞其光明威神功德」の八字は聞光力の三字とし、「日夜称説至心不断」の八字を心不断の三字とし、「随意所願得生其国」の八字を往生の二字になされたり。まことに巧妙なる偈頌並びに和讃の御製作なり。爾れば聞光力と云は、光明の威神力を聞と云ことに間違ひなきなり。ときに、この文のころでは、古来の解には弥陀の攝取不捨の光明の利益ゆへに、行者のところが不断に相續すると云ことを明すなりと云。なるほど攝取不捨の光益にて行者の憶念心が相續すると云事、吾祖毎々の玉ふ事なり。爾れども今は夫とは明し方が違ふなり。兎角聖教を伺ふに疎漏なるゆへに、吾祖の真面目のあらはるる時節はなきなり。ときにこの文の正意は、聞光力と云は光明の威神力をきくと云こと、其威神力をきくと云は外の事ではなひ。念仏の衆生を撰取して助け玉ふと云がすなはち第十八の本願のすがたなり。爾れば光明の威神力をきくと云がすなはち弥陀の

本願を聞ことなり。さてきくと云は『一多証文』に「きくと云は信心をあらはすみのりなり」とありて、きくと云はただおほやうにきくにあらず。ききひらきて信することなり。ゆへに吾祖の御左訓に「弥陀のおんちかひをしんじまいらするなり」との玉ふ。爾れば「聞光力のゆへなれば、心不断にて往生す」との玉ふたは、弥陀の本願力を信じたゆへに、今行者の憶念心が不断に相續するやうにとりたのなり。若自力疑心の行者ならば、願力の不思議をまうけに信ぜぬものゆへに、いつまでも若存若亡にて憶念心が相續せぬなり。今他力信心の行者は夫とは違ふて、聞光力と云て誓願の不思議力をまうけに信じておるゆへに、其信心が不断に相續するなり。巻頭の『和讃』に「信心まことにうるひとは、憶念の心つねにして」と仰せられたと同じころなり。この「憶念の心つねにして」と云にも、相續常・不断常のかはりあり。今は其中の不断常なり。ゆへに「心不断」との玉ふ。爾らば本願の貴さを思出すときも思出さぬときも、如来御回向の金剛の信心は、しばらくもたえまなく胸の内に相續する事を「心不断」と云なり。即ち高田本の左訓に「ほたいしんのたえぬによりてふたんといふ」とあり。この菩提心と云は金剛の信心のことなり。『六十華嚴』五十九(二十八左)に「例如金剛於百千劫處於水中而不爛壞亦無變異菩提之心亦復如是」とあり。自力の菩提心でさへも、まことの菩提心は金剛の如くかはらぬなり。一たび菩提心を起しても、其心が或はかはり、或はなくなるならば菩提心ではなし。況んや今は他力横超の菩提心ゆへに、かはるのなくなるのと云ことはなきゆへに、「心不断にて」とあることにて、菩提心のたえぬによりて「心不断」との玉ふなり。

仏光測量なきゆへに

難思光仏となづけたり

諸仏は往生嘆じつつ

弥陀の功德を称せしむ

十に難思光。この難思光と申すは弥陀の光明の御徳を心に思ふても、思ひ計られぬと申す徳なり。夫ゆへに第一句に「仏光測量なきゆへに」との玉ふ。「測量」は二字ともにはかると申す文字で弥陀の御徳を心に思ひ計りてみても計られぬことを測量なしとの玉ふなり。御草稿の御左訓に「しきははからのきわなきをいふりやうはかすをしるをいふなり」と。これは測の字と量の字と同じはかると云文字なれども、分くれば義が違ふと云事を御示しなされるなり。「測」の字は『玉編』に「度也広深也」。爾れば、きはほとりのなひふかひことをはかりてみるが、「測」の字のころなり。夫故左訓には「はからのきわなきをいふ」とあり。

「量」の字は『説文』に「称轻重也廣匀に度多少也」とあり。爾れば何十貫目あると云重ひ軽ひをはかり、何百何十あると多少をはかるが「量」の字のころなるゆへに、かずをしるをいふと積し玉へり。これは「測量」の二字を分て字義を出し玉ふはかりなり。文の意は、弥陀の光明はどうも心に思ひはかりてもはかられぬと云ことにて、「仏光測量なきゆへに」との玉ふなり。「難思」とは文字の通りにて心に思ふても思ひがたく思ひはかられぬことなり。『述文讀』中（四十四右）に「非諸二乗等所測度故難思也」とあり。この二乗と申されたは、仏を除ひて聲聞・菩薩の二乗なり。常に声聞・縁覚のことを二乗と云へども、今は『大経』「二乗非所測唯仏獨明了」の文の意を以て釈せらるるにて、「唯仏獨明了」とあれば、仏と仏とは御存じであらふが、仏を除て其外では普賢・文殊の菩薩でも、舍利弗・目連の声聞の智慧でも、おもひはかられぬと云ことを、すなはち『本偈』の文に「其光除仏莫能測」とあるが其意なり。

「諸仏は往生」等。これは『本偈』の文に「諸仏歎往生称其功德」とあり。『大経』の文では「随意所願得生其國為諸菩薩声聞大衆所共歎誉称其功德」とあり。これにより玉ふなり。「往生嘆じつつ」の往生の言は、上の『和讃』の「心不断にて往生する」とある往生の言をうけ玉ふなり。十方衆生が聞光力のゆへに心不断にて浄土へ往生

する。其往生する事を諸仏の讃歎なさるるなり。ここが難思光の光徳を御述なさるる所で、諸仏通途の利益では往生のならぬ衆生なるに、弥陀の利益で往生すると云は、どう云わけて往生するやら仏を除いて外の者は、心に思ふても思ひしる事のならぬ不思議の光明の利益なり。夫ゆへに今十方諸仏が声をそろへて讃嘆なさると云事を「諸仏は往生嘆じつつ 弥陀の功徳を称せしむ」との玉ふなり。

「称せしむ」とは漢文で「令称」とあれば、十方諸仏が外の者へ称揚せしめ玉ふことになる。今は和文ゆへに十方の諸仏方の自分に弥陀の功徳をほめさせらるる事を「称せしむ」との玉ふ事なり。これは先輩仏乗房の弁にいへる事あり。世俗通用の書簡に「一筆令啓上」とかけども、人に啓上せしむることではなひ。自分に啓上いたすと云事なり。爾れば今も「弥陀の功徳を称せしむ」とあるは、十方諸仏方が弥陀の功徳を称揚とほめ玉ふなり。ときに『大経』の文でみれば、浄土へ往生する往生人の功徳をほめさせらるる事なり。今こは弥陀の功徳をほめることになされたは如何ぞと云に、これは吾其『讚弥陀偈』の文の意を探りて仰せらるるなり。自体が扨の経文には、菩薩・声聞・大衆、衆生を嘆ずると説である。夫を『讚弥陀偈』では次の経文をとり来りて「十方諸仏歎往生」とありて、十方諸仏の衆生の往生を讃嘆なさるる事にもし玉へり。諸仏の讃嘆とするときは諸仏方は、いつでも弥陀の第十七願にこたへて、つねに弥陀を讃嘆なさるる故に、極楽へ往生する。往生人を讃嘆なさるるが、即ち往生人をほめるではなひ。往生すまじきものを往生せしめ玉ふ弥陀の功徳をほめ玉ふなり。爾れば鸞師、経文に「菩薩・声聞・大衆」とあるを諸仏の讃嘆となさるる思召をさぐりてみれば、弥陀の功徳をほめさせらるる事になさるるなり。ゆへに、吾祖は其鸞師の意を探りえさせられて、弥陀の功徳を称せしむとの玉ふ。これでなければ難思光仏を讃嘆なさるる偈文にはならぬなり。

神光の離相をとかざれば 無称光仏となづけたり

因光成仏のひかりをば 諸仏の嘆するところなり

十一に無称光。無称光と申すは、弥陀の光明の徳は口にときても説かれぬと申す御徳なり。夫故に「神光の離相をとかざれば」との玉ふなり。即ちこの一句が無称光の義を御述なさるるなり。「神」とは不測になづくと釈して、測られぬ事を神と云なり。すなはち『大経』の文に「無量寿仏威神光明」とある。其威神光明を略して「神光」との玉ふなり。「離相」は相たを離ると云ことにて、弥陀の光明は即弥陀の無上涅槃のさとの御かたちなるゆへに、有為生滅の相たを離れてまします。ゆへに「離相」と云なり。『大乘義章』十八（四左）に、「如經中說離於十相名為涅槃」と。『経』と云は『涅槃経』にて涅槃の離相を明す經文なり。涅槃の離相と云は、仏の無上涅槃は色・声・香・味・触の五つの相たと、生・住・滅の三つの相と、男・女の相とこの十種を離れて在すが仏の無上涅槃なり。今此に「神光の離相」との玉ふこれなり。「とかざれば」とは、光明が直に弥陀の無上涅槃のさとの形ぢなれば、つねに色・声・香・味・触のすがたが、生じたり滅したりの有為生滅のすがたをはなれて在す故に、説くに説かれぬなり。今家の左訓に「むげくわうぶちのおんかたちをいひひらくことなしとなり」とあり、これ光明が直に無碍光仏の御形ぢなれば、真報身のさとのかたちゆへに、とくととかれぬ故に「無称光」の義ぢやとの玉ふ御釈なり。かやうな所を末学の内にも取違る者がありて、真実報土の弥陀如来は、色も形ちもなき周偏法界の浄土にて西方浄土にありと説くは、釈迦の方便説にて弥陀は法界に遍満して、色も形ちもなきが真実報土の弥陀なりと云へり。これらが聖教の所判になきことを申すなり。先達て申す如く、弥陀如来は法性ではなし。吾祖「真仏土卷」の御定判に、光明無量寿命無量の本願成就真報身なりと御定めなさるるなり。報身なれば形ちはなひとは申さ

れぬなり。『大乘義章』十八（左六）報身の色相を明して離身なれば、三十二相八十種好を具する報身は、其三十二相は八十隋形好の一々の相好に各々無量塵数の相好があり。さりながら、一々の相好に分量なきゆへに、つねのものはみることあたはずといへり。爾れば真実報土の弥陀如来は無量の相好無量の莊嚴を具へ玉ふとも、一々の莊嚴に分量なきなり。応身の仏の相好とはちがふて、無分齊無分量の相好は、説くにとかれぬと云事にて、御左訓に「むげくわうぶちのおんかたちをいひひろくことなしとなり」と仰せられるなり。

「無称光仏となづけたり」。「称」の字は言にてときのべる事なり。今は言ばにときのべられぬ光明ちやと云事にて、「無称光仏」と名くるなり。夫ゆへに高田の左訓に、「すべてことばおよばぬによりてむしようくわうぶちとまふすなり」

「因光成仏のひかりをば諸仏の嘆ずるところなり」とは、これに古来二義あり。一義には、衆生が弥陀の光明の利益に因て、浄土へ往生して弥陀とかはらずほとけになることを「因光成仏」と云なり。このときは因の字は因由の義でただよると云事なり。又一義には、弥陀の成仏の事。弥陀の因位に於て光明無量の本願を誓ひ玉ふ。其本願によりて、今弥陀如来と云仏になり玉ふことを「因光成仏」と云。このときは、この因の字が果に対する因の字で、たねと云事なり。又「光」の字は光門無量を御誓ひなされる事なり。阿弥陀如来は光明無量の誓願を因として成就なされたゆへに、「因光成仏」と云なり。これもひかりによりて成仏すると云事は同じことなれども、義のとり方がかはるなり。この二義の中、祖師の御左訓は後の義なり。すなはち今の御左訓に「ひかりきはなからんとちかひたまひてむげくわうぶちとなりておはしますとしるべし」とありて、阿弥陀如来の因位に光明無量と誓ひ玉ひて、今無量光仏と云仏になり玉ふとなり。爾れば「因光成仏のひかり」と云は、阿弥陀仏の光明なり。阿弥陀仏の光明をば十方諸仏の讃嘆なさるゆへに「諸仏の嘆ずる所なり」との玉ふなり。ときに阿弥陀仏の光明を諸仏方、讃

嘆なさるるはいかやうに讃嘆なさるるぞと云へば、昼夜一切尚未能尽なほど説ても説き尽されぬとの玉ふが、諸仏讃嘆の至極なり。ここが説くに説かれぬ無称光のすがたなり。十方諸仏も釈迦如来の如くに弥陀の光明を讃嘆し玉へども、ほめつくされぬところが無称光なるゆへに、無称光の下へ諸仏の讃嘆を出し玉ふなり。ときに、この「因光成仏」と云ことを、根本の『大経』でみれば、「至其然後得仏道時普為十方諸仏菩薩歎其光明亦如今也」とありて、衆生が弥陀の光明の利益によつて浄土へ往生して弥陀と同じ仏となり、弥陀とかはらぬ光明をそなへたる時に、十方の諸仏方が今日弥陀の光明を讃嘆なさるる如く、其往生したものの、成仏したときの光明を讃嘆なさるるなり。この経文でみれば、初の義が経文によく叶ふなり。御左訓は経文とそむくのは如何と云に、吾祖『本偈』の意をとりて御述なさるるなり。『本偈』の文に「因光成仏」とある文により玉へり。

ときに阿弥陀仏の光明を諸仏方の讃嘆なさるるは、いかやうに讃嘆なさるるぞと云へば、昼夜一切尚未能尽、なほ説ても説き尽されぬとの玉ふが、諸仏讃嘆の至極なり。ここが、説くに説かれぬ「無称光」のすがたなり。十方諸仏も釈迦如来の如くに弥陀の光明を讃嘆し玉へども、ほめつくされぬところが「無称光」なるゆへに、「無称光」の下へ諸仏の讃嘆を出し玉ふなり。ときに、この「因光成仏」と云ことを、根本の『大経』でみれば、「至其然後得仏道時普為十方諸仏菩薩歎其光明亦如今也」とありて、衆生が弥陀の光明の利益によつて浄土へ往生して、弥陀と同じ仏となり、弥陀とかはらぬ光明をそなへたる時に、十方の諸仏方が今日弥陀の光明を讃嘆なさるる如く、其往生したものの、成仏したときの光明を讃嘆なさるるなり。この『経文』でみれば、初の義が経文によく叶ふなり。御左訓は経文とそむくのは如何と云に、吾祖は『本偈』の意をとりて御述なさるるなり。『本偈』の文に「因光成仏光赫然」とあり、この「光赫然」とある御言は、『大経』の次上の文に「無量寿仏光明顕赫」とある文により玉

へり。爾れば鸞師の御意は弥陀の因光成仏にて、弥陀の光明の事になさるるなり。これが鸞師の『経文』の意を得て浄土へ往生した往生人の成仏のひかりをば、弥陀の光りのことになさるるなり。夫でなければ、「無称光仏」を讃嘆する偈文にはならぬ。夫は如何と云に、往生人の成仏したときの光明を讃嘆するなれば、弥陀の「無称光」を讃嘆にはならぬ。夫ゆへ鸞師の御意は、經の意を得て、弥陀の光明を諸仏が讃嘆なさるることにして「無量寿仏光明顕赫」の經文を一緒になされしなり。吾祖は其鸞師の意ろを探て、弥陀の光明の事になされて「因光成仏の光りをば 諸仏の嘆ずるところなり」との玉ふ。

第十六会

光明月日に勝過して 超日月光となづけたり

釈迦嘆じてなをつきず 無等等を帰命せよ

十二に超日月光。これは、弥陀の光明の世間の日月の光りにこへすぐれさせられたる徳を讃嘆し玉ふなり。「光明月日に勝過して」とは、「勝過」と云は、「勝」はすぐるる、「過」は超過の義で、こえすぎたる事にて、此「勝過」の二字を以て、「超日月光」の「超」の字を御釈なさるるなり。ときに弥陀の光明の日月の光りにこえすぐれさせられた相たは、「真仏土巻」御引用の『述文讚』中(四十四右)に「日夜恒照不同娑婆二耀之輝故超日月」と。この意は娑婆世界の日月のひかりは、月は夜を照せども昼を照さず、日は昼を照せども夜を照さず、弥陀の光明は昼夜ともにつねに照し玉ふ故に、日月の光りにこえすぐれ玉ふなり、となり。一行阿闍梨の『大日経義釈』一(初

右)に、「世間日則有方分若照其外不能及内明在一邊又唯在昼光不燭夜如来智慧日光則不如是等」と。是三義あり。一には、世間の日輪は外を照せども、内は照さず。これは家の内までは照さぬなり。如来の智慧の光りは内ともに照し玉ふなり。二には、世間の日輪は一邊は照せども二邊は照さぬなり。これは、東の方を照すときは西はかげになり、西の方を照すときは、東の方はかげになる故に、二邊は照さぬなり。如来の智慧の光りは、二邊ともに照し玉ふなり。三には、世間の日輪は、昼はてらせども夜は照さず。如来の智慧の光は昼夜ともに照し玉ふゆへに、「大」字を加へて大日と云と釈せり。今『述文讚』の釈は、この義第三の釈に同じきなり。又存覺上人の『顕名鈔』にはこの外に一義を設けて御釈あり。ときに実を剋して論ずるときは、弥陀の光明を「超日月光」と名くるは、世間の日月に三義すぐれた事があるによりて「超日月光」と名く。五義すぐれたによつて「超日月光」となづくると申すことではなし。ただ弥陀の光明は世間の日月に百万倍こへ勝れたる故に、「超日月光」と名け玉のなり。これは経説にあることにて、『大阿弥陀経』上(十三左)「阿弥陀仏光明殊妙勝日月之明百万億倍」と。爾れば、ただ百万倍すぐれさせられたと云事にて「超日月」と云なり。ときに、弥陀の光明は「諸仏光明所不能」と説て、あらゆる諸仏の光明にこえずぐれたる御光りなり。爾ればわづか娑婆世界の日月の光りにこえずぐれた位ではなひ。何故に十二光の中に「超日月光」の徳を、一立て玉ふやと云に、これは娑婆の衆生へ対して、弥陀の光明を勝れたすがたをば手近く説くには日月にこえずぐれたる光明ぢやと説より外のことはなきなり。『論註』上巻に「勝過三界抑是近言なり」とあり。これは弥陀の浄土は諸仏の浄土にこえずぐれたる浄土なれども、夫をば娑婆世界の衆生に手近く云て聞かせるときは、この娑婆世界に勝れた浄土ぢやと云てきかせるより外はなき故に、「浄土論」に「勝過三界道」と説せられたり。夫ゆへ「勝過三界はそもそも近言なり」との玉ふなり。「近言」と云は、遠ひことを手近かに云てきかせること。今「超日月光」と云も其如く弥陀の光明は諸仏に勝るるの菩薩に勝るると云て

は、凡夫は仏菩薩のことは存ぜぬゆへに、仏菩薩の光明に勝るとありて、何ほど勝れたやら合点せぬなり。故に娑婆界の今日の凡夫のよく知ておる日月を出して、弥陀の光明はこの日月の光りに百万倍こへすぐれたる光明なりと、娑婆の衆生に手近く説きかせ玉ふが、「超日月光」の徳なり。これがもと弥陀の因位の御本願のときから光明の勝れたすがたをば、娑婆の凡夫に手近く知らせんとて、「超日月光」と御誓ひなされたゆへ、『大阿弥陀経』上（十一右）に第二十四の願に「我仏になりたならば、我光明日月の光りにすぐること百千億万倍なら（ん）」と。これ凡夫に手近く弥陀の光明のすがたをしらせんとて、弥陀の因位の本願から御成就の「超日月光」なり。今十二光を列るも、この「超日月光」の最も終にあるは、十二光の最初から段々弥陀の光明の御徳を述させられたこの次上の「難思光」・「無称光」の所で心におもふても計られぬ、口に云てもいひ計られぬ光明ぢやと讃嘆なさるる所で弥陀の光明の徳をほめおわりて、心も言もたへはてたる御徳ぢやとあらはし玉へり。夫ならば弥陀の光明はとんと思ふこともならぬ光明かと云へば左やうではなひ。愚かな凡夫でも常にみておる日月の光りに百万倍こえ勝れたる光明なりとしらせる為に、「超日月光」ををかせらるるなり。

「釈迦嘆じてなをつきず」とは、この拠は『大経』に「我説無量寿仏光明威神巍巍殊妙昼夜一劫尚未能尽」とあり。釈迦如来の四弁八音を以て、昼夜一劫が間だ弥陀の御徳を讃嘆し玉ふても、讃嘆し尽されぬと仏自ら御述なさるるなり。今この経文によつて「釈迦嘆じてなをつきず」との玉ふなり。ときにこの経文のころをここへ出し玉ふは、どう云譯けぞと云に、『大経』でもこの経文が弥陀の光明を讃嘆なさるる結讚の文なり。今、『讚弥陀偈』并に『和讚』でもここが弥陀の光明を讃嘆し玉ふ結び止めの所ゆへに、この経文を挙て結嘆し玉ふ。上來段々と十二光を以て弥陀の光明を讃嘆したれども、これはまことに大海の一滴を述ると云ものにて、釈迦如来の無碍弁才でさへも讃嘆し尽せぬとの玉ふからはこれで尽る事ではなひと結びとめさせらるる意にて、「釈迦嘆じてなをつきず」

との玉ふなり。爾れば文は「超日月光」の下にあれども、意は総じて上を結びとめ玉ふ御言なり。

「無等等」とは、『十地經』の中に仏を「無等等」と名けてあり。夫を、『十地論』二（四左）に「云無等等者諸仏比餘衆生彼非等故等者此彼法身等故」と云は、ひとしき事なしと云事。仏は一切衆生の中の最極尊なるゆへに、一切衆生仏にひとしきものは一人もなひと云事、又下の「等」の字は、諸仏のさとりは平等なるゆへに諸仏同士はひとしと云ことにて、「無等等」と名るなり。この『十地論』の釈では、「無等等」と云は「無等」の「等」と云ことなり。又『法華玄義』の『釈籤』二之一「無等等」と云は、「無等」と云義なり。例せば無上々と云が如く、無上の無上と云事なり。夫からみれば、今「無等等」と云も、「無等」の「無等」と云事にもあるべきなり。此義は、まづ仏は一切衆生の最極尊にてひとしきものがなひによて、「無等」と云。爾れば、「無等」と云が仏けのことなり。其「無等」の仏けにひとしきものは外になひと云事にて、復「無等」と云言を加へて「無等」の「無等」と云。夫を略して「無等等」と云と釈するが、『釈籤』のころなり。ときに御草稿の左訓に「ひとしくひとしき人なし」とあり。この御釈では、「無等等」と云が等々なしと云事にて、ただひとしひものはなひと云事なり。仏にひとしきものはすべてなひと云事にて、「無等等」と云。これは、常にかはりたる義ぢや。ときに『大論』四十二に、「無等等」を釈するに二釈あり。後の釈は、『十地論』の釈と同じことなり。初の釈では、一切世間の中に於て外にひとしきものなきゆへに、無比と云。無比はすなはち「無等等」なりとあり。この義で云へば、「無等等」と云がただひとしきことなしと云こと。今の御左訓は、この『大論』の義に同じきなり。ときに前後の例として、結句にあげ玉ふ仏名は、其一首の『和讃』に讃嘆する所の徳を取て直に仏名とし玉ふが例なり。爾れば、今「超日月光」の下へ「無等等」と云仏名をあげさせられたは、如何と云に、『大經』の讚仏の偈文に「光顔巍巍威神無極如是燄明無與等者」とあるは、法蔵菩薩御師匠の世自在王如来の光明を讃嘆し玉ふ御言にて、「其無與等

者」と云は、即ち「無等々」の事なり。世自在王如来の光明にひとしき光明は、外にはなひと云事にて、「如是焰明無與等者」との玉ふなり。次に「日月摩尼珠光焰耀皆悉隱蔽」とあるは、外にひとしきものなき光明なるゆへに、日月等の光明はこの世自在王如来の光明に隱蔽せられて光りがなきなり。爾ればこれが即ち超日月の相たをのべ玉ふなり。この「讚仏偈」の文からみれば、今の文に「光明月日に勝過して、超日光と名づけたり」とあるは、弥陀の光明は日月にすぐれ玉ふこと百千万倍にて、ひとしき光明は外にはなひとの玉ふなり。是偈文の「無與等者」を初の二句で明し終たゆへに、其弥陀の光明は外に等ものはなひと云徳をとりてすぐに、弥陀の仏名にして「無等々を帰命せよ」との玉ふなり。爾れば、吾祖の御左訓此經文の意なるべし。

弥陀初会の聖衆は 算数のおよぶことぞなき

浄土をねがはんひとのみな 広大会を帰命せよ

二に讚衆徳三。初に讚旧住衆三。初に初会多衆。上来の十三首は弥陀の仏徳を讚嘆し玉ふ。已下は極衆の菩薩聖衆の徳を讚嘆し玉ふゆへに、二に衆徳を讚ずると科す。其中三段と分れ初に住を嘆ずる中、弥陀初会の聖衆の多きを明なり。

「弥陀初会の聖衆」とは、「初会」と云は、「会」は集会の義で、阿弥陀如来の正覚御成就なされて始て御説法の会坐に集り玉ふ。菩薩衆、数限りなく集らせられたと云ことで、「弥陀初会の聖衆は 算数のおよぶことぞなき」との玉ふなり。夫ゆへ、御左訓に「みだのぶちになりたまひしとき、あつまりたまひししやうじゆのおほきことなり」とあり。ときに、この聖衆とあるに付て『法苑珠林』十三（四左）に、『増一阿含』等の經説によて過去七仏

の会数が明してあり。維衛仏は、三会の説法にて入滅し玉ひ、隨葉仏は、二会の説法で入滅し玉ふ等、一仏一仏の説法の会数を明せり。今阿弥陀如来の説法の会坐のことは、『大經』の中に、初会のことか説てあれども、二会とも三会とも説てなきなり。是何故ぞと云に、過去七仏などは、応身仏にて御一代八十年とか八万歳とかかぎりあるゆへに、説法の会坐にも二会とか三会とか数が定りあることなり。今阿弥陀如来は報身仏にて、報身は有始無終にて成仏の始めあれども、尽未来際入滅の終りなき仏けゆへに、初会のことか説てあれども、末の事は説てなき所以なり。『述文讚』中(四十五左)に、この初会と云事を釈して、初会とは「偏拳不尽之言也顯無數故」と云へり。

この意は、不尽の言と云は、物を云つくさぬ言と云ことなり。今『大經』に初会とは、かりにて二会とも三会とも説てなきは、云尽さぬ不尽の言のやうにきこゆるなり。されどもこれは、無数を顯すがゆへにと釈するなり。この憬興の釈に、「顯無數故」と申されたが、この經の意をえたる釈なり。今、『大經』に、弥陀の初会のことを説は説たれども、初会のことを説が所詮ではなし。これは、極樂の菩薩聖衆の無量無数なる事を顯すが所詮なり。なぜと云に、弥陀如来初て説法し玉ふ初会でさへも、この通りに無数の菩薩聖衆が集らせられしなり。況んや其後の菩薩聖衆は無数なることを顯すなり。即ち今の『和讃』も其意で初会の聖衆の数の多きを挙て、すべて極樂の聖衆の無量無数なることを明し玉ふなり。

「聖衆」とは、「聖」は凡夫に対して聖と云なり。日本では、ひじりと和訓するは、非をしりたる人と云事なり。仏教でさばくときは、『大乘義章』十七本(初右)「聖は正なり」とありて、これは真如法性の理はゆがまずまっすぐなものなり。其真如法性の理をさとり顯したが聖者なるゆへに、「聖衆」となづくるなり。

「算数のおよぶことぞなき」とは、「算」は、かぞへるなり。「数」は、かずなり。一二三四等の物をかぞへる数のことを「算数」と云なり。この数の名にもいろいろあり。漢土では、黄帝の二十三数とて、一二三から段々のほ

りてかぞへる数の名が二十三あるなり。仏教では、『俱舎』の「世間品」では六十数あり。『華嚴經』では百二十転数として、百廿の数の名を説てあり。今は阿弥陀如来の初会の聖衆の数が、あらゆる数の名で説かれるやうな事ではなひ。数の及ばぬ聖者ぢやと云事で「算数のおよぶことぞなき」との玉ふなり。『大經』の文では、喩を挙て「弥陀初会の数は目連の神通で数へたらば、大海の一滴ばかりもしれる。又数へられぬ所は、大海の水ほどあり」と説てあるなり。

「ねがはん」とは、はむの反。ふと反へる故に、ねがふと同じ事なり。ときに、この一句の拠、『讚弥陀偈』にはなし。爾れば、何に拠て加へ玉ふぞと云に、これは『讚弥陀偈』の一偈一偈の間に、「願共諸衆生往生安樂國」と礼文が入てあり。此願文の意は、「願くば、もろもろの衆生と共に浄土へ往生せんと願ふところのある人ならば、我と同じ浄土を願へよ」と、願生の行者を誘ひ玉ふなり。今、吾祖四十八首の『和讚』の一首一首の『和讚』に「帰命せよ」とある御言は、其義を顕し浄土を願ふところあらば、早く弥陀に帰して浄土を願へよとある事にて、下知の言ばをおかせらるるなり。爾るに、今この『和讚』は仏徳を讃嘆し終りて、聖衆の徳を讃嘆なさるる最初の『和讚』なり。夫ゆへ、ここでは其「願共諸衆生往生安樂國」の意を『和讚』の中へ御述なされて「浄土をねがはんひとはみな 広大会を帰命せよ」との玉ふなり。

「広大会」とは、「広大集会」の義なり。上に弁する如く此三十七名は、必しも經論に拠ありて仏名を立て玉ふには非ず。『方等大集經』などに其例ありて、其一偈を讃嘆する所の徳をとりて、直に仏名にして帰敬し玉ふなり。今も其例にて、この『和讚』は、弥陀初会の聖衆の数の多きを挙て、総じて極樂の菩薩聖衆が広大により集り玉ふと云事を讃嘆する『和讚』なり。故に、其所讚の徳を取てすぐに、弥陀の御名にして広大会と名け玉ふなり。かかる広大会の徳ある阿弥陀如来へ早く帰命せよとの玉ふ意なり。さて、草本の御左訓に「十方のしゆじやうみなごく

らくにて止いふなり」と、羽州本・高田井に同じ。鱗形の異本の河州本には「発心」とあり。是れ依用しがたし。若し「発心」ならば、草本の仮名「ほちしん」とあるべし。爾るに、今「ほふしん」とあり。即ち真如法身の事なり。此御左訓は、「得至蓮華藏世界 即証真如法性身」の意にて、十方衆生極樂に生たものは皆な、真如法身を証ると云事、是が弥陀を広大会と名る積なり。此釈如何んと云に、浄土の主伴莊嚴を分つときは、弥陀は主莊嚴、仏広大会は菩薩聖衆の集りたこと故に、伴莊嚴になるなり。弥陀の名には非ず。爾るに、今弥陀の仏名にするは、十方の衆生浄土に往生すれば、皆な法身を証る。爾れば、其内証よりいへば、弥陀と同じ法身故に内証に約し、「広大会」をば弥陀の仏名とすると云は、巧妙なる御積なり。

第十七会

安樂無量の大菩薩 一生補処にいたるなり

普賢の徳に帰してこそ 穢国にかならず化するなれ

二に大衆の行徳二。初補処普賢徳。上の『和讃』は、弥陀初会の聖衆の数多きことを讃嘆し、已下の二首は、浄土の菩薩大衆のみなすぐれたる徳を具え玉ふ事を讃嘆し玉ふ。夫ゆへ、科文に大衆の行徳と科す。其中でこの初の一首は、浄土の菩薩はことごとく一生補処の菩薩にて、衆生救度の普賢の徳を修し玉ふ御徳があると云事を明し玉ふ故に、補処普賢の徳と科するなり。

「安樂無量の大菩薩」とは、「安樂」は安樂浄土なり。今初に国名を票し玉ふたは、諸仏の国へ対して拳玉ふた

ではなし。安樂国中の、無量無数の菩薩と云事なり。この一句は、上の『和讃』を受させられた句にて、上は弥陀初会の聖衆の数の多き事を挙て、而も安樂浄土に無量無数の菩薩あると云事を明し玉へり。今夫をうけて、「安樂無量の大菩薩」との玉ふなり。

「大菩薩」とは、『本偈』には「摩訶薩」とあり。梵語の「摩訶」、此に大と翻するゆへに、今は「大菩薩」との玉ふなり。眞実報土の菩薩は、みな寂滅平等身をさとり玉へる法身の居士なるゆへ、「大」の字を付て「大菩薩」との玉ふ。

「一生補処にいたるなり」とは、安樂浄土の無量の菩薩はみな、一生補処の菩薩なりと云事にて、「一生補処にいたるなり」との玉ふ。「いたる」と云は、二十二の願に「必至一生補処」とある。其「至」の字を転じて來て安樂国の菩薩、「皆な一生補処にいたる」との玉ふ。全体『本偈』の文が、此一段は全く二十二願の意を述玉ふ故に、吾祖直に願文よての玉ふ。下の「普賢の徳に帰する」と云も、『本偈』にもなし。故に、二十二の願にての玉ふなり。「一生補処」とは、仏処を補うと云事にて、この一生を尽せば、仏けのあとをつぎ玉ふ菩薩と云事なり。この娑婆世界では、弥勒菩薩が一生補処にして今兜卒天に生じて在す。即ち五十六億七千万年と申すは、兜卒天の一生なり。其一生が尽れば、この人間界へ降らせられて、釈迦如来の如く成仏し玉ふ。爾れば、弥勒菩薩は釈迦如来の跡を補はせらるるゆへ、一生補処の菩薩と名くる。是応身仏になる一生補処の菩薩なり。又、報身仏の一生補処ならば、兜卒天に生れ、或は人間界へ生じ、八相示現のことはなし。因位の行成満し玉ふときに、直に成仏し玉ふが報身なり。爾れば、一生を尽せば仏のあとを補ひ玉ふと云ことはあるべからずと云に、これは『探玄記』四（五左）に、「若約実報四種変易報中唯有末後無有生一位猶存故云一生」と。補処の菩薩は、無有生の一生を尽せば成仏し玉ふ故に、一生補処の菩薩と名ると云意なり。「無有生」と云は、『梁撰論』の中に、四種の生死が説て

あり。其中今は第四の生死なり。「無有生死」と云は、「無有」はある事なしにて、ただ死する事ありて再び生ずる事なしと云事なり。これに、実には死すると云事なし。ただ等覺の菩薩の因位のからだをすてて、仏果のさとりり身になり玉ふを死と名る。夫ゆへ、死すると云義はあれども、生ずると云事なき生死なり。ゆへに、これを「無有生死」と云なり。爾れば、報身仏の等覺の菩薩は、「無有生死」の一生を尽せば仏のあとを補ひ玉ふと云ことにて、「一生補処」と名くるなり。今安樂浄土の菩薩はみな、其一生補処の位ぢやと云事なり。ときに、娑婆世界の応身仏ならば、前仏入滅し玉ふ後ち後仏其あとを補ふ補処の菩薩と申すべきなり。今、安樂浄土の阿弥陀如来は尽未来際涅槃に入玉ふことなき報身仏なれば、仏の跡を補ひ玉ふ補処の菩薩はあるまじき事にあらずやと云に、極樂浄土は仏の跡を補ひ玉ふと云ことはなかれども、十方仏土何れの世界へ至りても、仏の跡を補ひ玉ふ徳ある菩薩ゆへ、「一生補処」と云なり。例れば、『般若経』の会座に集り玉へる菩薩をば、即『般若経』の文に皆一生補処の菩薩なりと説てあり。夫を、『大論』七（十三右）「問曰若弥勒菩薩应称补处诸餘菩薩何以復言絡尊位者答曰是菩薩於十方仏土皆補仏処文」と、是弥勒菩薩は跡を補せらるる菩薩故に、一生補処にてあるべきなり。外の菩薩もみな十方浄土へ至りて仏処を補ひ玉ふ菩薩なるゆへに、一生補処と名ると釈し玉へり。今、極樂浄土の菩薩を一生補処と名るも、其如くなりと知べし。

「普賢の徳に帰してこそ」とは、まづ「普賢」と云は菩薩の名なり。『探玄記』二（二十九左）に云「徳周法界曰普至順調善曰賢普普遍義」で此菩薩の功德法界にみちみちてあまねきゆへに、「普」と云。「賢」は賢善の義にて、其性柔和なる慈悲深き善人なるゆへに、「賢」と云とあり。爾れば、この普賢菩薩は慈悲をつかさどり在すゆへに、すべて慈悲の行の事を普賢の行と云なり。今も安樂浄土のあらゆる菩薩みな普賢菩薩の徳を具へ玉ひて、衆生済度の大慈悲の行を修し玉ふと云事で「普賢の徳に帰してこそ」との玉ふなり。夫故に、今家の本の御左訓には、「だ

いじだひひをまふすなり」とあり。高田本左訓に「われら止まふすなり」とありて、普賢菩薩はあらゆる仏の慈悲をつかさどりましますゆへに、仏の至徳の慈悲を直に普賢の徳と云なり。『法華経』にある通り、普賢菩薩は白象に乗て顕れるは、普賢の人体を直に普賢と名るゆへに、人の普賢なり。又「三乗教」より「一乗教」へ入る智解を普賢と名くるは、解の普賢なり。又普賢の行と云ときは、すべて大慈悲の菩薩の行を普賢と云なり。今は、其中の行の普賢にて、済度の大慈悲の行の事を「普賢の徳」との玉ふなり。

「帰してこそ」とは、「帰」は「帰趣」の義にて、おもむきむかふと云事なり。安樂浄土の菩薩は、再び迷ひの住家へたちもどると云事はなけれども、衆生済度の普賢の徳に趣むかせらるるときは、還來穢国度人天と、穢国へたちもどりて衆生を利益し玉ふなり。

「穢国」とは、この娑婆世界の如く有漏雑善のけがれはてた所を穢国と云なり。

「かならず化するなれ」とは、「化」は、草本御左訓に、「めぐむ反」。是は化益の義にて、衆生を化益するは、即ち衆生を恵むことなり。又「あはれむ反」、是は悲化の義で、かなしむ事、又「おしふ反」、是は教化の義。此三訓ともに此に具る義なり。鱗形の異本「まぼろし反」、是は幻化の義、今入用なし。強て积せば、衆生済度に付て、『論註』に、「度無所度」と云事あり。是は終日済度すれども、済度する所なし。如何と云に、菩薩は所化の衆生畢竟して、無体なりと体達して度し玉ふ故に、我の外に別に度すべき物体ありと思ふは我執なり。よつて終日度すれども、畢竟幻化の境界と云事を今「まぼろし反」との玉ふなり。さて、「化するなれ」と云言は、上の句の「こそ」の手仁葉をうけたる言にて「こそ」と言かけたるときは、是非なれと、「れ」の字でとめねばならぬなり。「こそ」と云は、これ計りと申すことなり。安樂浄土の菩薩がこの穢国へ立もどり玉ふことはなきはづなれども、普賢の徳におもむき玉ふとき計り、かならず穢国にたちもどりて、衆生を化益し玉ふぞとなり。これで文相は弁じ畢る。

ときに、この一首の「和讃」は、『大経』では第二十二の願文により玉ふなり。古来『註解』等の末書并に近来の『嘗解等』の意は、先初の二句は安樂浄土の菩薩みな一生補処に至り玉ふ事なり。さりながら、衆生済度の望みある菩薩は、其一生補処にいたらずして、普賢の徳に帰して穢国にたちもどりて、衆生を化益し玉ふゆへ、後の二句に「普賢の徳に帰してこそ 穢国にかならず化するなれ」との玉ふと釈するなり。これは甚だ祖意にかなはぬなり。全体二十二の願文の解し方が、他流の意と大に違ふなり。古来『末註』の解し方は他流の意と同じ事なり。今家の意にはかなはぬ。爾らば、これはいかが解するぞと云に、「安樂無量の大菩薩 一生補処にいたるなり」と、安樂浄土の大菩薩はみな一生補処に至り玉ひて、他方世界へ至りて仏の跡を補ふて成仏し玉ふ筈なり。爾るに、衆生済度せんが為に、成仏せずしてやはり一生補処の菩薩で御座なされて、普賢の徳に帰して穢国にたちもどりて衆生を済度し玉ふとある事で、「普賢の徳に帰してこそ 穢国にかならず化するなれ」との玉ふが、祖師の思召なり。他流では安樂浄土の菩薩は一生補処の位になるが頂上の所なり。夫を、衆生済度のときは、其一生補処にならずに、夫より下地の菩薩で衆生を化益し玉ふと云意也。鎮西流の『大経望西の抄』などの解しかたがみな左やうなり。今家の意は、左やうではなし。「臨終一念の夕べに、大般涅槃を超証す」とありて、安樂浄土へ参りかけに弥陀とかはらぬ大般涅槃をさとり、其内証は、弥陀と同じき仏けなれば、表てむきにて成仏し玉ふはづの菩薩なれども、夫が衆生済度の為に成仏せず、一生補処の位に在して普賢の行を修して衆生を済度し玉ふと云が今家の意なり。故に、吾祖『広文類』の御高判第十一願は、往相の証果。第二十二の願は、還相回向と分玉ひ願土にいたれば、すみやかに無上涅槃を証してぞ、其浄土へ生ずると直に無上涅槃の仏果をさとるが、第十一の願成就の相たなり。其無上涅槃の仏果をさとりたものは、かならず衆生済度の大悲大徳の行を具するゆへに、其方をば第二十二の願成就の如く一生補処の菩薩になりて還相の利益をなし玉ふなり。『唯信文意』（十右）云、「無上覚に止いふなり」等、普

賢の行と云は大般涅槃の多用なり。火には物をやく用ある如く、大般涅槃のさとりをえたものは是非衆生済度の化益の多用があるなり。夫故に、極楽の菩薩は涅槃の仏果をさとる玉へる上に、因位のすがたを現して補処の菩薩の位にて衆生済度の行をなし玉ふなり。

十方衆生のためにとて 如来の法蔵あつめてぞ

本願弘誓に帰せしむる 大心海を帰命せよ

二、集仏法蔵徳。この一首は浄土の菩薩の衆生済度の為に如来の法蔵をあつめ玉ふ徳をのべ玉ふなり。爾るに、古来の末註『私記』『註解』等の意は、弥陀の仏徳をのべたる「和讃」として、初の二句は阿弥陀如来十方衆生の為に、もろもろの功徳をあつめ南無阿弥陀仏の名号を成就し玉ふ事なり。其十方衆生を悉く第十八の本願へ帰せしむるゆへに、「本願弘誓に帰せしむる 大心海を帰命せよ」との玉ふたと解す。此の義甚だ非なり。拠の『讚弥陀偈』も『大経』の文もみずして、ただ「和讃」の文ばかりで解したのなり。先づ文段を分てみるべし。弥陀の仏徳を讃ずる事は、上の「光明月日」の「和讃」迄に終りてここは、浄土の菩薩の徳を讃嘆し玉ふ所なり。ゆへに、拠の文からみれば、上の「和讃」と一連に二十二の願意を述玉ふなり。

「十方衆生のためにとて」とは、浄土の菩薩、普賢の行を修し玉ふは何の為ぞと云へば、まさしく衆生の為なりとの玉ふなり。これは、拠の『讚弥陀偈』にも『大経』二十二の願文にも「為衆生故」とあり、其衆生と云は十方世界の衆生の事ゆへに、「和讃」では、「十方」と云ことばを加へて、「十方衆生のためにとて」との玉ふなり。

「如来の法蔵あつめてぞ」とは、如来の法蔵と云言ばづかひは、『大経』の最初に「入仏法蔵究竟彼岸」とあり。

この「仏の法蔵」と云を、淨影の疏に積して真如の体の上に過恒沙の功德をおさめて在すを、仏の法蔵と云と云り。古来の未註みな淨影の疏を引て、今阿弥陀如来・真如如来蔵をさとらせられて、其如来蔵に具へたる恒沙の功德を名号の中へ集め収めて衆生へあたへ玉ふ事を、「如来の法蔵集めてぞ」との玉ふた掬の經文に「積累徳本」とあり。『本偈』には、「集仏法蔵」とあり。爾れば、淨土の菩薩の功德を集め玉ふ事にて、阿弥陀如来の名号成就のことにはあらざるなり。これは「如来の法蔵」と云は、「如来」と云は諸仏如来なり。「法蔵」とは「法」は功德法なり。法・般・解の三徳の中の法身の「法」の字を、『大乘義章』に功德と積したると同じ事なり。下の「蔵」の字は、含摂の義にて、もろもろの功德を一つも残らずふくみおさめたる所の「法蔵」と云なり。爾れば、「如来の法蔵」と云は、あらゆる諸仏の功德の事なり。夫故仏光寺に伝る「和讃」の御左訓には、「よろづのふつのくどくなり」とあり。『河州本』亦同じ。これでなければ、二十二の願文にはあはぬなり。これは、安樂淨土の菩薩方があらゆる諸仏の功德をあつめつまらせられて、夫で衆生を濟度なさることなり。故に、二十一の願文に、「遊諸仏国修菩薩行供養十方諸仏如来開化恒沙無量衆生」と説てありて、極樂淨土の菩薩の平生の御所作は、外の事はなし。しばらくの間も、十方諸仏の国に遊て仏の説法をきき、諸仏を供養して常に衆生を濟度し玉ふばかりなり。諸仏の説法をききては智慧を増上し、諸仏を供養しては供養の福を増上して、福德智慧の二修の行を修し玉ふ。これ功德をあつめ玉ふなり。ときに、安樂淨土の菩薩が、御自身はすでに弥陀とかはらぬ仏に成て在すに、御自身の為に功德をあつめ玉ふにはあらず。みな衆生へ功德を施す為に、諸仏の国に遊んで功德をあつめ玉ふゆへに、「十方衆生のためにとて 如来の法蔵あつめてぞ」と仰せらるるなり。

「本願弘誓に帰せしむる 大心海を帰命せよ」とは、「本願弘誓」とは、二十二の願文に「除其本願被弘誓鑑」とある文字をとり来り玉ふなり。爾るに、二十二の願文でみれば、この「本願弘誓」と云は、淨土の菩薩の御自身

の本願なり。爾るに、今「和讃」に「本願弘誓に帰せしむる」との玉ふて、「帰」は、「帰入」の義で、弥陀の本願弘誓に帰入せしめ玉ふことに伺はるるなり。夫では、「大経」の文に背くかと云に、浄土の菩薩の本願は、外の本願にはあらず。衆生済度の本願なれば、主莊嚴の弥陀の本願の通りを願ひ玉ふが浄土の菩薩の本願なり。ゆへに、菩薩の本願は即ち弥陀の本願なり。夫ゆへ経文では、菩薩の本願とみゆれども、吾祖は弥陀の本願のことにし玉ふなり。爾れば、浄土の菩薩、十方衆生を化益して、主莊嚴の弥陀の本願へ帰入せしめ玉ふと云ことにて、「本願弘誓に帰せしむる」との玉ふなり。

「大心海を帰命せよ」と。「大心海」の言の出处は、『維摩経』二(二左)「心大如海」と云へり。僧肇の註に曰、「其智淵深莫能測者故曰心大如海」。深広無涯底の意にて、阿弥陀如来の智慧は深ふして、底なく広くしてほとりなき故に、海にたとへ玉ふ。御智慧がすなはち御ころなるゆへに、今は「大心海」との玉ふなり。この智慧海は、すなはち弥陀本願海なり。故に、善導大師の『往生礼讃』には「弥陀智願海深広無涯底」との玉ふなり。爾れば、今この「大心海」とあるは、弥陀の衆生を済度し尽さずばおくまひと云、広大の心より成し玉ふた本願海なり。とくに、爰へ「大心海」の名を出し玉ふは如何と云に、これは『浄土論』に、「天人不動衆清淨智海生」とあり、夫を『高僧和讃』に「天・人不動の聖衆は 弘誓の智海より生ず」とありて、安樂浄土の菩薩はみな、弥陀の智願海より生じ玉ふなり。夫からみれば、この「和讃」のころは、弥陀の大心海より生じ玉ふ菩薩なるゆへに、弥陀の本願の通りをうけつたへて、十方衆生の為に如来の法蔵をあつめて、弥陀の本願に帰入せしめ玉ふ、となり。爾れば、浄土の菩薩の徳かと思へば、其もとを尋ぬれば、弥陀の大心海の徳なり。この極樂浄土のあらゆる菩薩、みな弥陀の大心海より生ずる菩薩ゆへに、浄土の菩薩の徳のあるに付ても、この大心海の弥陀に帰命し奉れよと、菩薩の徳を本にゆづりて弥陀の御徳になされて「大心海を帰命せよ」との玉ふなり。

第十八会

観音・勢至もろともに 慈光世界を照曜し

有縁を度してしばらくも 休息あることなかりけり

三に、上首化物観勢の二菩薩は、極楽のあらゆる菩薩の上首なり。この一首は、観・勢の二菩薩衆生化益の相を述玉ふゆへに、上首の化物と云なり。上來は、旧住の菩薩を総じて讚じ玉ふ。この「和讃」は別して、上首の徳を讚嘆し玉ふなり。爾れば、この「和讃」までに極楽の旧住の菩薩をば讚嘆し尽し玉ふゆへ、この次の和讃よりは新任の菩薩を讚嘆し玉ふなり。

「観音」とは、具に觀世音と云。『法華文句』二之二(二十一右)に、梵語では、婆楼吉泥此に觀世音と云。觀世音と云は、世音を觀ずると云ことにて、この菩薩常に世間を觀じ玉ひて、苦にあふ衆生がありて、觀音の名を稱するときは、其觀音の名を稱する音声に隨て苦を救はせらるるゆへに、觀世音と名るなり。この觀世音をば、或は觀自在とも或は光世音と名くと云異説を會通して具さに釈するは、『華嚴』の『探玄記』十九(二十六右)に云如し。「勢至」とは、この菩薩の至らせらるる所大勢力をなし玉ふによりて、「大勢至」と名くるなり。これは『法華文句』二之二(二十一右)に、『思益經』を引てこの勢至足を投ずるところ、三千世界及び魔の宮殿を振動する。かくの如く大勢力がある菩薩ゆへに、「勢至」と名くるなり。高田の「和讃」には、「至」の字を「志」の字につくりてあり。これは、同音の文字にて相通ずるなり。善導大師の「定善義」(三十三右)「志」の字につくりてあり。爾

れば、古来より通じ用んことゆへに、吾祖も御草稿の本では「志」の字につくり玉ふなり。この二菩薩のことは、『大経』下巻に「有二菩薩最尊第一」とあり、極楽の無量の菩薩聖衆の中に、最尊第一の菩薩なり。「威神光明普照三千大千世界と常に光明」を放ちて、三千大千世界照し玉ふと説けり。この経文により玉ふ『讚弥陀偈』並にこの「和讚」なり。

「もろともに」とは、「この二菩薩もろともに」と云事なり。これをば二菩薩外の菩薩ともろともにと解する義あれども、よろしからず。

「慈光」とは、『観経』の中に観世音菩薩の光明のことは「其光柔軟普照一切」とあり。観音は弥陀の慈悲を主り玉ふゆへに、其光明慈悲柔軟を以て本とすると説玉ふなり。又、『観経』に勢至菩薩の光明をば、「以智慧光普照一切」とあり。勢至は弥陀の智慧を主り玉ふ故に、其光明の事を智慧光と説くなり。今は、観音勢至の二菩薩の光明を一所に出し玉ふところゆへに、慈悲の方へしたがへて「慈光」との玉ふなり。又、観音も勢至も、衆生済度の利他門のときは、俱に慈悲から光明を放ち玉ふ故、「慈光」との玉ふなり。「世界」とは、『本偈』には、「大千界」とあり、『大経』の文には「三千大千世界」とあり。今、夫を略して「世界」との玉ふなり。

「照曜」とは、てらしかがやくなり。高田本左訓に「てらしかがやく」とあり。此釈聞へたり。次に「つきひのひかりのかがやく」とあり。此釈解しがたきなり。今考るに、月日のひかりかがやくことまでにかけていふぞとの玉ふ。即『唯信文意』の中に有る経を引かせられて、観音は日天子と顕れ、勢至は月天子と顕れ、観音・勢至の二菩薩が、日月となりて世界をてらし玉ふとの玉ふなり。この有る経文と云は、『安楽集』下（二十一右）に引てある『須弥四域経』なり。ときに、今この「和讚」は、極楽浄土の観音や勢至の二菩薩の光明の三千世界をてらしかがやかせらるる事を明し玉ふ和讚なり。爾れども、極楽浄土の観音・勢至の二菩薩の三千大千世界をてらし玉ふ事は、

凡夫のしらぬ事なり。夫故、観音・勢至の二菩薩の光明で世界をてらし玉ふ事を手近にしらせ玉ふて、月日の四天下を照し玉ふ如くぢやと云事で、月日のかがやくにかけての玉ふなり。かけると云は、梅がえに来鳴く鶯春かけてと云如く、冬から春へかけてと云ことなり。こゝらで日月のひかりを云ではなし。極楽の観音・勢至の二菩薩の光明のことなれども、月日のひかりのかがやくまでにかけてのべるとある御左訓と相みへるなり。

「有縁を度してしばらくも」等、「度」は「済度」にて、有縁の衆生を済度し玉ふなり。観音・勢至の二菩薩といへども、縁のなき衆生は済度しがたきゆへに、縁ある衆生を済度し玉ふなり。ときに、これは掬の『本偈』には、具さに喩へをあげ玉ひて「度諸有縁不暫息如大海潮不失時」とあり。これは海の潮はさしほ引しほ少しでも時を失はぬものなり。今観音・勢至の二菩薩の有縁の衆生を済度なさるるも、其如くにて、今すぐへばよいと云縁の出来た時を考え玉ひて、直に其時を失はずに済度し玉ふとなり。ときに観音・勢至の二菩薩の有縁の衆生を済度なさると申すこと、『観経』にはあれども『大経』には説ず。爾れば、『観経』により玉ふかと云に考るに、『大経』異訳の『大阿弥陀経』（三十六右）に、この観音・勢至の二菩薩は、阿弥陀如来の左右につきしたがひ玉ふ。即阿弥陀如来この二菩薩と御対座にて、つねに十方世界を済度すべきことを議論し玉ひ、もし、度すべき衆生があれば、この二菩薩をつかはして、暫の間に飛行自在にして衆生を済度し玉ふとあり。これが有縁を度し玉ふ相たなり。縁のあるも縁のなきもかまはずに済度し玉ふならば、阿弥陀如来と二菩薩とが、対座して議論し玉ふには及ばぬなり。十方世界のことをば御相談なさるるは、彼の衆生は今助ける時節なり。此衆生は、今助くる縁はなひ等と論じ玉ふなり。休息は二字共にやすむなり。今家の左訓に「やすむことなし」とあり。有縁の衆生ばかりを済度なさるるによりて、閑暇があるかと云へば、左やうではなし。有縁の衆生ばかり済度し玉へども、しばらくもひまなく御休みある事なく衆生を済度し玉ふとなり。

安樂淨土にいたるひと 五濁悪世にかへりては

釈迦牟尼仏のごとくにて 利益衆生はきはもなし

二讚新任衆二 初正讚衆徳二 初讚利行徳二

初、明利生如仏。已下の四首は、新任の菩薩を讚す。其中初の二首は、新任の菩薩の自利々他の行徳を讚す。其中今は、利他の徳を挙るなり。

「安樂」とは、『大經義家の疏』に、「自無危險故曰安心無憂惱故曰樂」。「安」の字は「不危也」と註して、安穩にしてあやうげのなき事なり。夫故に、身に危げをはなるるが「安」の字なり。又心にうれへなやみのはなれてたのしむは、「樂」の字の意なり。これは、「安樂」の二字を、身と心とに分けて『淨土論』の「永離身心悩受樂常無間」の意にて、釈せらるるなり。又、『唯信文意』の中では「よろづのたのしみにして、くるしみまじはらぬを安樂と云」と釈して其末へに、「涅槃の異名を挙玉ふところに、「涅槃を滅度とも、無為とも、安樂とも云」とあり。

これが、『涅槃經』に依て仰せらるることにて、眞実報土のたのしみと云は、凡夫五欲の境界のたのしみのやうな事ではなし。眞実報土のたのしみはすなはち、涅槃の大樂大般涅槃常樂我淨の四徳の相たなり。夫故、「上の安樂無量の大菩薩」の「和讚」も、この「和讚」も、ともに普賢の行を明す「和讚」なるゆへに、先最初にこの「安樂」と云名を出して眞実報土へ往生したものはまづ、大般涅槃のさとりをひらきて涅槃の大樂をうくる。其涅槃の大樂をうけたものが、直に衆生済度の大悲をおこして普賢の行を修すると明し玉ふ思召ゆへに、最初に「安樂淨土」へとの玉ふなり。

「五濁悪世にかへりては」。五濁のことは、大乘では『瑜伽論』・『善戒經』等、小乗では『俱舍論』の「世間品」

等に見へたり。浄土門では、『阿弥陀経』に列ねてあり。釈家には、「序分義」・「法事讃」に出してあり。今「和讃」では、『正像末和讃』にくはしく出ることなり。今はぎつと弁ぜば「五濁」と申すは、「濁」はにごるなり。最初清んだ水がだんだん濁る如く、世が末になればなにもかもおとろへてわるくなるのが「五濁」なり。まづ「劫濁」と云は、上に出たる如く「劫」は梵語で「時」のことで、「劫」と云ゆへ、時のおとろふることをば「劫濁」と云なり。「見濁」と云は、末世になるほど人の邪見邪分別の増上することなり。又、煩惱が次第に増するのが「煩惱濁」なり。又、親にも不孝をする、主人にも不忠をしようと云やうに、人の悪くなるが「衆生濁」なり。命ちのみぢかくなるが「命濁」なり。『正像末和讃』には、くはしくこの「五濁」の事が出てあり。「二万歳にいたりては 五濁悪世の名をえたり」とあるは、『悲化経』の説なり。人寿二万歳が五濁の最初ゆへに、釈迦如来人寿百歳の時に御出世なれば、五濁悪世のただ中へあらはれて衆生を濟度し玉ふなり。ゆへに、今この「和讃」に「五濁悪世にかへりては」とあるは、次の句の「釈迦牟尼仏のごとくにて」と受けるためなり。今浄土へ往生したる菩薩、この娑婆世界のやうなる五濁悪世へたちかへり、衆生を濟度し玉ふことは、全く釈迦如来の五濁悪世に出て衆生を濟度し玉ふと同じことなりとの玉ふなり。この五濁悪世にかへるとあるが、この娑婆世界にかぎりたることではなし。十方世界の中に此娑婆世界の如き五濁悪世界は、かずもかぎりもなくあることなり。故に、抛の『本偈』にも、『大経』にも、「他方五濁悪世界」との玉ふなり。「釈迦牟尼」とは、梵語にて、『華嚴音義』一(十四)に、釈迦此に「能仁」と云。「能仁」は釈迦の御氏なり。釈迦如来の御先祖は、慈悲ぶかき人にてありし故に、「能仁」と云なり。「牟尼」と云は、御名にて、此に寡黙と翻するなり。寡黙は、身口意の三業にさはがしきことをば止めて在すと云ことなり。「利益衆生はきはもなし」とは、釈迦如来の娑婆世界へ出現し玉ふ如く、八相示現しておもひの俤に衆生を利益し玉ふことなり。ときに、この「和讃」の抛の『大経』の文に、「除生他方五濁悪世示現同彼我国

也」とあり。これは、極楽浄土の菩薩方が衆生済度の為に、他方世界五濁悪世の所へ出現することは、我が国の如くぢやとの玉ふなり。これを『大経浄影疏』下(二十一右)に云、「釈迦の自説我国諸菩薩との玉ふは、極楽浄土の菩薩五濁悪世へ衆生済度に出玉ふは、我娑婆世界の菩薩の如くとある経文なり」と釈するなり。今、鸞師は爾らず。『讚弥陀偈』に「如大牟尼」とあり。今夫を承て「釈迦牟尼仏のごとくなり」との玉ふなり。浄影も釈義の竜象なれども、これは鸞大師の御覧なされやうが『大経』の文にかなふたる正義なるべきなり。『大経』の文に、「我国の菩薩」とはなし。ただ「我国」とあり。「我国」とあるは、この娑婆世界は釈迦如来の自国なるゆへ、この娑婆世界をさして「我国」との玉ふなり。外の人が云のではなし。釈迦如来の御言に「如我国也」との玉ふからは、我国へ我出現したる如くぢやとの玉ふに違ひなし。浄影の意では、経文の上に菩薩の二字を加へて見ねばならぬなり。爾れば、釈迦如来の如く八相示現して、衆生済度に出ることを、「釈迦牟尼仏のごとくにて 利益衆生はきはもなし」との玉ふなり。ときに、一類の異解者ありて、この「和讃」に「安楽浄土に至るひと」とあるは、これは安楽浄土へいたる人と云ことではなし。いたらふと云事で、娑婆に居ながら釈迦牟尼仏のごとくに、還相回向の所作をなすことぢやと云一義なり。これは、文をまげて義をとる僻法門なり。若し安楽浄土にいたらふとする人ならば、「安楽国をねがふ人」となければならぬなり。其上異解者のやうでは、「五濁悪世にかへりては」といはれぬなり。かへると云は、浄土へ往生した人なればこそ、かへると云ことはあるべけれ。浄土へ往生した人がたちかへりて衆生済度をなすのではなければ、「還相」とは申しぬなり。娑婆に居ながら浄土へゆきがけに人をすすめみちびくは、往相回向の中で自信教人信、常行大悲と云ものにて、還相回向ではなし。夫を、還相回向と名を付るは、全体娑婆を離れて極楽なく、娑婆即ち浄土なり。此に居ながら直に仏ぢやと云、一益法門を立る料簡なり。吾祖の漢文、和語の聖教にかつてなきことなり。今、「和讃」も上からの文の次第にて、浄土の菩薩を讚嘆し玉ふに、まづ

旧住を讃嘆して此には新住の菩薩の浄土へ往生したまふ御徳を讃じ玉ふところにて、娑婆にいる人を讃嘆し玉ふてはなきなり。

第十九会

神力自在なることは 測量すべきことぞなき

不思議の徳をあつめたり 無上尊を帰命せよ

二、明供仏自在。「供仏」と申すは、供養諸仏と申す事にて、十方の諸仏を供養するを云なり。この「和讃」は、安樂浄土の菩薩、十方世界に遊て諸仏を供養し玉ふに、自在を得たまふことを明すゆへに、「供仏自在」と云なり。「神力」とは、『法華文句』十之一(三十八左)に、「神名不測力名幹用」と釈して、「神」の字は、はかられぬ徳のある事なり。「力」の字は、人のえせぬ事をよくなすはたらきなり。爾れば、「神力」と云は、何事によらずはかられぬはたらきをする事を云なり。「自在」とは、『法華玄義釈籤』四之一(六十右)言、「自在者不謀而運一切無碍也」とありて、任運無功用に、一切のさはりをはなれたることを、「自在」と云なり。ときに、今「神力自在」とあるは、浄土の菩薩何のはたらきの自在なる事ぞと云に、これを『私記』などの料簡には、上の「和讃」に「釈迦牟尼仏のごとくにて 利益衆生」に神力自在をえてましますことを、「神力自在なることは 測量すべきことぞなき」と上の「和讃」をうけての玉ふなり、と解してあり。爾るに、これは『本偈』にはすべて二十句の偈文あり。今は終りの二句を挙玉ひて、前の十八句を略し玉ふなり。初の十八句には、何を明し玉ふぞと云に、極樂の菩薩は、

ただ一食の間に十方世界に遊でもろもろの如来を供養し玉ふ。其供養の具に、いろいろの不思議ありて、諸仏を供養しおわりて食時のすまぬうちに、虚空を飛行して極楽へかへり玉ふと述であるなり。爾らば、この一段も浄土の菩薩の諸仏供養の行に於て自在神力を得玉ふことをのべ玉ふ。即四十八願の中には、第二十三の供養諸仏の願、第二十四の供具如意の願成就の相たを明し玉ふ。夫を、今「神力自在なることは」との玉ふなり。

「測量すべきことぞなき」とは、其神力自在なることは、いかなるわけにて自在の働きがあるやらんとはかりてみても、はかられぬとの玉ふなり。「測量」は、今家の左訓に、「はかりはかることなしとなり」とあり。これは、上の「仏光測量」の所にも出たる言なり。いまここはただ、はかることのならぬことを「測量すべきことぞなき」との玉ふなり。ときに、この句に、「ことぞなき」と云、その字を「なき」と「き」の字にて止てあり。これは、歌などの手仁葉にもそえるにてとめると云が常の格なり。「しのぶることのよほりもぞする」（玉の緒よ絶えなば絶えねながらへば 忍ぶることのよわりもぞする 新古今 恋一 一〇三四）、又「ただ有明の月ぞのこれる」（ほととぎす鳴きつる方を眺むれば ただ有明の月ぞ残れる 千載 夏 一六一）と、いずづれもそえるにて止めるなり。爾るに、今「そ」を「き」にてとめてあり。加やうなる手仁葉の格もあることなり。古今の歌に「唐衣日も夕暮れになるときはかへすがえすも人ぞこいしき」又、「てりもせぬくもりもやらぬ春の夜のおぼろ月夜にしくものぞなき」。これらはみな、「ぞ」を「き」で止るなり。今もその格にて、「測量すべきことぞなき」との玉ふなり。ときに、上の「和讃」は、衆生利益の還相を述べ、この「和讃」は供養諸仏の行を述玉ふ。自利々他を以て分つときは、上の「和讃」は利他の行、この「和讃」は自利の行なり。爾るに、『讚弥陀偈』には、いろいろのことがあれども、夫をみな略して「和讃」には、この二利の行を挙玉ふはなにゆへぞと云に、上に引て弁ずる如く、第二十二の願文に「供養十方諸仏如来開化恆沙無量衆生」とありて、十方諸仏を供養し無量の衆生を利益すると申すが、二十二の

願成就のすがたなり。夫ゆへ、上の「和讃」とこの「和讃」と、其二十二の願成就の普賢の行のすがたをのべ玉ふなり。

「不思議の徳をあつめたり」とは、これは『讚弥陀偈』十八句の文を略し玉ふ故に、其かはりにこの一句を加へ玉ふなり。其上に『讚弥陀偈』には、この次に十二句の偈文ありて浄土の菩薩の自利々他の徳を讚嘆してあり。今はそれまでを略し玉ふゆへに、この「不思議の徳をあつめたり」の一句を加へ玉ふなり。これは浄土の菩薩の、諸仏を供養し玉ふに付ていろいろの神変不思議のあるもまた、平生自利々他の徳も一ト口に云ときは、不思議と云より外はなきゆへに、今一句に収めて「不思議の徳をあつめたり」との玉ふなり。これ吾祖御製作の別途にして『讚弥陀偈和讃』の広略無齊の体裁なり。ときに、ここに「不思議の徳をあつめたり」とあるは、浄土の菩薩の不思議の徳をあつめ玉ふことにはあらず。この句は、阿弥陀如来の方に不思議の徳を集めさせられたと申す事なり。夫は何ゆへぞと云に、極楽の菩薩の諸仏を供養し玉ふに付ていろいろの神変自在あるも、其外平生の自利々他の行も其本を尋ぬれば、みな兆載永劫の修行を以て阿弥陀如来の方に加容な不思議の徳をあつめさせられ、浄土へ往生した菩薩方に、この不思議の徳あるやうに成就し玉ふゆへなり。爾れば、浄土の菩薩の不思議の徳をきくにつけても、ただ「無上尊」の阿弥陀如来を「帰命せよ」とある句へ結帰する文勢とみへるなり。この「不思議」と言は、『讚弥陀偈』を略し玉ふ言にて、すなわち鸞師の『論註』に依ての玉ふ言なり。『論註』下（五左）五の不思議を挙げさせられて、次に「此中仏土不思議有二種力」とありて、「一者業力謂法蔵菩薩出世善根大願業力所成 二者正覚阿彌陀法王善住持力所撰此不可思議」と、この因力果力のちからによりて、極楽浄土が不思議なりと釈して其下に依報十七種の莊嚴を釈し玉ふに、みな不思議々々にて釈し玉へり。これからみれば、極楽浄土に不思議のあるはみな、阿弥陀如来の因位の大願業力、果上の自在神力を以てあつめ玉へる不思議の徳なり。故に、其『論註』の意をとり

来り玉ひて「不思議の徳をあつめたり」との玉ふなり。

「無上尊」とは、私は天上天下唯我独尊にして、仏にうへこす尊はなきゆへに、諸仏のことを「無上尊」と名くるなり。仏を「無上尊」と名くる事は、処々にあることなれども、別して阿弥陀如来を「無上尊」と名くることは『大経』三十行の偈文に「恭敬遶三帛稽首無上尊」とあり。これらに依りて「無上尊を帰命せよ」との玉ふなり。

安楽声聞菩薩衆 人天智慧ほがらかに

身相莊嚴みなおなじ 他方に順じて名をつらぬ

二、讚涅槃妙果二、初明所証平等。この一首の「和讃」は、浄土へ往生したるものは平等一味のさとりをうる事を明すなり。上の二首は第二十二の願成就の普賢の行のすがたにて、衆生利益の還相のすがたと供養諸仏のすがたをのべ玉ふなり。これより下の二首の「和讃」は第十一願成就の涅槃の妙果の相たなり。眞実報土の妙果と云は、この涅槃のさとりと普賢の行との二つに収まるなり。これが曇鸞大師の『讚弥陀偈』により玉へども、夫を根本の『大経』にもどりて示し玉ふなり。『大経』四十八願の説相で云ときは、眞実報土の妙果と云は、第十一願・十二の願、この二願の成就なり。これがまた吾祖初めてかやうに御覧なさるるには非ず。曇鸞大師の『論註』の下巻、十八・十一・二十二の三願を引て十八願を眞実報土の因、十一・二十二は眞実報土の果、これより外に浄土の果のすがたはなきゆへに、今この「和讃」二、上の二首は二十二の願成就のすがた、これより下は十一願成就のすがたと分るるなり。

「安楽」とは、第四の句に他方の言を出す故に最初に浄土の名を標し玉ふなり。

「声聞菩薩衆」とは、「声聞」とは声を聞てきとると云ことにて、すべて「声聞」は仏の在世に生れて直に仏の教を聞て証るゆへなり。この声聞にも、大乘の声聞、小乗の声聞と云かはりあるゆへに、「声聞」の名を積するにすべて三義あり。『大乘義章』十七本（二右）に、具に出たり。「菩薩」と申すは具に菩提薩埵と云。菩提と云は、仏果無上のさとりなり。薩埵は、衆生の梵語にて無上菩薩を求る衆生と云ことで、菩薩と云なり。この菩薩の名を積するにも三義ありて、『大乘義章』十七末（二十四右）の如し。

「人天」とは、人間と天上となり。ここに声聞と菩薩と人と天との四類を列ねてあり。安樂浄土には、この四類あり。まづ極樂の聖衆は、観音・勢至を始としてみな菩薩なるゆへ、菩薩のあるは勿論なり。四十八願の中に「声聞無数の願」と云がありて、極樂には声聞衆が無量無数あるなり。其上に、「国中人天」とて、人と名け天と名くるものもあり。爾れば、極樂の聖衆は名を分つときは、声聞・菩薩・人・天の四類あり。夫を此へ挙て「安樂声聞菩薩衆人天」との玉ふなり。爾るに、名を分ては如是に、四類が分れども内証のさとりが平等なるゆへに智慧も相好もすこしもかはることなしとあることにて、「智慧ほがらかに 身相莊嚴みなおなじ」との玉ふなり。夫ならば、其声聞・菩薩・人・天と名のかはるはいかんと云に、夫は他方に順じて名をつらぬとなり。爾れば、この一首は眞実報土の平等一味の妙果を挙玉ふなり。

「智慧ほがらかに」とは、『讚弥陀偈』の文には「智慧洞達」とあり。菩薩の智慧を得玉ふ所にて、朗然大悟とほがらかにさとられ、一切眞俗二諦にとをりぬけたる所を「智慧洞達」と云。夫を今この「和讃」には「智慧ほがらかに」との玉ふなり。

「身相」とは、浄土の菩薩の身は悉皆金色にて三十二相の相好に無量塵数の相好を具へて在す。是を「身相」と云なり。

「莊嚴」とは、首には宝冠を頂き、身には応法の妙服を著する等の無量のかざりあることなり。夫ゆへに、高田の本左訓に、「かざり反かざる反いつくし反」とあり。ときに上の「智慧ほがらかに」とあるは、内証の徳の方、この身相莊嚴は外相の方なり。真実報土の無量の聖衆は、内証も外相も少しもかはる事なくみな同じ事なるゆへに、「みな同じ」との玉ふなり。こゝを『大経』の文に「咸同一類形無異状」とありて、智慧も功德も相好も莊嚴も、すこしもかはらぬ平等一味の相たなり。ときにかやうに内証も外相もみな平等なるは、何故ぞといへば、これが第十一願成就の相たなり。「臨終一念の夕べ、大般涅槃を超証す」と浄土へ参りたるほどのものがみな、大般涅槃の妙果を同じやうにさとするゆへに、智慧も功德も莊嚴も、微塵もかはる事はなきなり。ときに、一つの俗難あり。極楽の聖衆は相好も莊嚴もみな同じと云はば、観音・勢至・普賢・文殊みな形ち同じきゆへに、互ひにとり違へることもあるべしと云に、仏境界と云ものは左やうなことはなし。無差別平等なところ、自ら差別があるによりて、内徳も外相もかはらぬ菩薩なれども、爾も一々の菩薩がみなかはるなり。例せば、『華嚴経』に毘盧遮那仏と云事を立てて、十身毘盧遮那の一仏の身に重重無量の仏身ありて、一々の仏身に重々無尽の仏身を具ること、帝釈天の宝網のうつりあふ如く、無尽不可説の仏身なれども、夫が無差別を壊せずして差別を具へるゆへに、少しも紛れる事はなしと云なり。今安樂浄土の菩薩も其如く無量無数の菩薩が「身相莊嚴みなをなじ」けれども、其無差別の中に一々差別の相が分るるなり。

「他方に順じて名をつらぬ」とは、内徳も外相もかわることなき平等一味なれば、声聞・菩薩・人・天と名のかはるは云何と云に、これは他方に順じて名をつらぬるなり。

「他方」とは経文には「余方」とあり。『讚弥陀偈』には他方とあるによりて、今も「他方」との玉ふなり。極楽浄土からのぞめて外の世界の事を他方と云。別して云へばこの娑婆世界をさすなり。娑婆世界には、舍利弗・目

連等の声聞もあり。普賢・文殊等の菩薩もあり。もとより人も天もあるゆへに、夫に順じて名を列ね玉ふなり。

「順」は経文には因順とあり。なぞらへる事を云とときに、この他方世界になぞらへて名を付ると云も、其なぞらへるわけがなければ名はつけられぬもの。よて『大経』の「義寂の疏」に二釈あり。爾るに、『註解抄』に「義寂の疏」を引き用ひずして、他方に因順すると云へるは、他方へなぞらへて名を列ぬると云ことなれば、其なぞらへるわけは吟味におよばずと云料簡なれども、左やうではなし。ものをなぞらへると云にもわけなくてはなぞらへがたし。京都の比叡山を東の富士山になぞらへ、新更科にて月をみるを、信州の更科になぞらへると云事はなきなり。ときに、「義寂の疏」に二義あれども、初の義は今家の宗義にはあはぬゆへ依用しがし。後の義では極楽浄土にまことの人天はなれども、瑠璃の大地による所では人と名け、虚空に飛行してあそぶ所では天と云。これが他方世界になぞらへて人天の名のあるわけなりと云り。これは『方等大集経』四（十三右）の浄光明仏の仏土の相を説て、その仏土にも人天の差別はなれども、地にあるを人と名け、空におるを天と云とあり。これは現に経説にある事なれば、とりもちひねばならぬ義なり。爾らば、声聞と云名のあるは、即ち『論註』上（十八）に釈して、みな他方世界の声聞、極楽へ往生せしなり。極楽では菩薩なれども、其本名にしたがへて声聞と名くと。又、例を引かせられて、帝釈天のことを仏け憍尸迦とよび玉ふ。帝釈はもと人間にありしとき、憍尸迦と名けたるゆへに、本名に従へて憍尸迦とよび玉ふ如くなり、との玉ふ。爾れば、極楽浄土にてはみな菩薩なれども、これらのいはれあるゆへに、他方世界に順じて人天と名け声聞と云故に、「他方に順じて名をつらぬ」と云なり。ときにこの所の『大経』の文は、浄土の妙果を説玉ふて、人・天・声聞・縁覚・菩薩の五乗の機が、浄土では一味平等のさとりをうると云事を説玉ふ。本願一乗のすがたなり。善導大師の「玄義分」に「頓教一乗海」との玉ふて、その一乗海のすがたを末にのべ

て「正由託仏願以作強縁到使五乗齊入」との玉ふ。弥陀本願を一乗と名くるは、人・天・声聞・縁覚・菩薩の五乗の機から、この弥陀の本願に乗託して眞実報土へ往生すれば、平等一味の仏果をさとる。ここが一切衆生をことごとく成仏せしむる本願円頓一乗のすがたなり。爾れば、かくの如く浄土に声聞・縁覚・菩薩の名あるは、即ち五乗齊入の一乗のすがたをあらはす所なり。ゆへに、或は人・天・声聞・縁覚・菩薩と分けたる五乗の機が、眞実報土で一味の仏果のさとりをひらくとの玉ふ。これが、即ち第十八願とは違ひ第十一願成就の涅槃の妙果の相たを示し玉ふなり。

浄土和讃講義卷二終

〈キーワード〉

還相 安樂 観音 勢至 弥勒